

小春日や杖一本の旅ごころ 村越 化石

掲句、おそらく園内の散策であろうが、手にする一本の杖に托す旅ごころはやるせない。ときとして抑えきれぬ旅ごころがうずくように湧くこともあるのであろう。そういう心の動きがあるがままに肯ってなお淡々とした心境がうかがわれる。化石の得た心境の深さ、それは生そのものを銜いなく見詰めている姿と言つてもよいものであろう。杖に托した心の表情はゆたかに彫り深い。

水澄めり降りて来さうな雲一つ 金子 篤子

澄んだ冷たさに一筋通うぬくもりが不思議な魅力を生んでいる句である。まず「水澄めり」と断定的に打ち出して澄み切った晩秋の静けさのなかへ読者を誘い出す。そして空を仰ぐと雲がひとつ、所在なげに浮かんでいるというのである。その雲を作者は「降りて来さうな雲」と見た。なんとなく心細げに下界を恋うているような雲だと見た。親しさのこもった見方である。

こういう見方を生んだのは、耳も遠くなるような晩秋の静けさに覚える孤独感だったかもしれない。作者は昭和五十一年八月、夫君金子無患子の急逝に会い京都を離れた。痛ましいことであつたが、その悲しみもいまは心の底に沈み、たとえば掲句のように或るなつかしきをもつて雲に語りかける姿となつてあらわれていると考えてよいであらう。

凍む国にただセロ弾くに降りにけり 林 香燿子

このセロ奏者、外国から訪れたのであろう。それも冬のきびしいさなかにこの国の土を踏んだのだ。ただセロを弾くというそのことのために孤独の影を異国に記したというのである。この句はセロ奏者という題材に作者の好みが働いているが、その孤影が際立つのは作者の心象を重ねて詠んでいるからである。そこに一步深く踏み入った作者が見られる。

魚跳んで光のこせり望下り 金子 晃典

美しい句である。「望くだり」は満月から次第に欠けて行く月のこと。満月へ近づく「上り月」の華やかさはない。それだけにこの「光」は、夜々に濃くなる宵闇を負つて望月の名残りのようなはかなさを呼ぶ。「望下り」の季題のあわれさをよく生かし得た作である。作者は昭

和二十二年に失明。掲句の透明さは、心の景として夾雑物が充分濾過された果てに生まれたものであろう。

柿の木の並びそれそれ木守柿 藤野 智弘

たしか但馬の出石いすしでの作と記憶している。町を出外れると道の片側に柿の木が並んでおり、そのどれもが申し合わせたように頂に一つずつ柿の実を残していた。よく晴れた日だった。この句はそういう状況を鮮明に呼び起こしてくれる。作者の囚われない自由な見方が生んだ作といえよう。

腹裂きし猪を吊せば霽くる 茂里 正治

篠山の冬のおとずれである。「腹裂きし」は内臓が取り除かれているさま。作者は丹波の冬につながる薄暗さをその空洞に見ている。「猪を吊せば霽くる」は里謡を聞くようなひなびた快いリズムを生むが、丹波という土地へ親しく語りかけたい気持ちが作者のなかにあるからである。

蓮掘つて常陸の端に泥まみれ 金丸 鐵焦

国鉄水戸管理局在職時代の作。先日、国鉄分割案が答申されたが、国鉄再建についてはかなり前から論議が盛んだった。批判もきびしかった。管理者層のひとりとして作者も悩むこと多かったのではないか。そう言うのも、作者はこの蓮掘りに自分を重ねて見ている趣を覚えるからである。人生を負った作といえよう。

木曾の犬氷りし胸毛鳴らし過ぐ 大串 章

作者はこの年名古屋へ転勤し、木曾を作句の場として新しく選んだ。あえて作句の場と言うのは、木曾を詠うのでなく木曾で詠うのだと作者がことあるごとに言っているのを聞いているからである。そういう根底には、俳句は題材ではなくて、心——つまり抒情という認識があるからである。正統に立つ認識というべきであらう。掲句は木曾へ足を運びはじめた頃の作。新鮮なおどろきに一句が生まれている。「氷りし胸毛鳴らし過ぐ」は事実そのとおりだったのであろうが、間髪を入れず一句が成った姿はおどろきの鮮度をそのまま読者に伝えている。この犬の精悍な風采、颯颯とした足どりも目に浮かんでくる。木曾とのよき出会いを物語る一句で

ある。

雪女いつ失せにける駅の椅子 松岡 里江

遠野の作。おそらく駅のベンチに居た女が気がついたら居なくなっていたのであろうが、作者はそこに雪女の幻想を見た。遠野という土地がそうさせたのかも知れない。この句の面白いところは、雪女を描かずにさむざむと残る駅のベンチだけを読者に差し出したところにある。雪女はいろいろと詠まれているが、想像で描くところはおおよそ似通ってくる。雪女を消してしまうことによって、かえってその不気味な生ま生ましさを覚えさせる掲句は、雪女を詠って出色の作といえよう。私は遠野を背景にこの句を味わってきたが、雪女の説話は何も遠野に限ったものではない。この句の背景もそれだけひろがるわけである。

熱燭にぬくもりて尿ゆたかなり 中台 泰史

作者はオホーツク海に面した常呂町の開業医。たいへん寒さのきびしい土地と聞く。この土地の寒さのきびしさは、人間の生理まで不活潑にしようのであろう。いま熱燭に充分ぬくもった作者は、「尿ゆたかなり」と寒さから取りもどしたわが身の快調をたのしんでいるので

ある。これも人間の真実の一面である。尿などといったものを詠みながら決して汚くはなく、一句のびのびとした解放感をもたらすのもそのためである。

わが郷の春や天女の岬より 勝又寿々子

ゆたかな句である。「天女の岬」は羽衣伝説をつたえる三保岬である。作者の住む清水の方から見ると、港をへだてて南に松原が黒く一線に望まれる。その松原がほのかに霞んで春の訪れを告げているのである。この句、「わが郷の春や」という詠い出しがおおらかであり、「天女の岬より」は読者に夢を与えてくれる。一句豊かな由縁である。天女伝説などというもの、よく知られているだけに一步誤れば俗臭にまみれるが、掲句の場合はゆったりした作者の呼吸につつまれてよく生きている。

関白道初音にゆるき降りかな 野川 釈子

関白道は小田原にあって、秀吉の小田原攻めをいまに伝える。この句は地名をたくみに生かして成功している。関白道が作者の心に充分に溶け入って一句のリズムのなかに生かされている。おそらく歩むに快い下り坂なのであろう。眺望もそれなりに目を楽しませるものがある

のであろう。ときおり驚の初音が作者の耳をまた楽しませるのだ。そして関白道という名の快さ。そういうことが作者の心のなかで溶け合って生まれた一句である。読む者もおなじ季節にこの道を歩いてみたい思いに誘われる。

櫓解きてたたけば馬面筒ひびき

栗飯原孝臣

この「馬面」は比喻、形容でなく真正銘の馬の顔。櫓を外して、いたわるように馬の顔をぽんぽんと叩いたら響いたというのである。「筒ひびき」が馬面の語以上に馬の顔を浮かび上がらせる。中村草田男に「西日の馬をしやくるな馬の首千切れる」があるが、馬という生きもののあわれを詠って掲句も記憶にとどまる作である。

湧く雲と渦を頌ちて白牡丹

黒坂綾子

明るいう句である。雲も牡丹も陽光にかがやいている。雲は雲、牡丹は牡丹、それぞれにいのちを燃やしている。その姿はそれぞれのものでありながらひとつの大きな力のもとにあると作者は見た。「渦を頌ちて」の、とくに「渦」に作者の見た大きな力を感じるからである。作者の作風の特色の明るさ、歯切れのよさをよくあらわしている作である。

明易のちちははの咳ひとつづつ

山口茶梅

作者は花巻に住み、みちのくに生きることを精神の支えに独自の境地をひらいてきた。掲句はしみじみとした味わいをもたらす作である。襖をへだてているのであろう。父の咳が聞こえたと思っていると応えるように母の咳がつづいたというのである。それも遠慮がちに「ひとつづつ」だったというのである。部屋の中はもう白んでいるのであろう。年老いた父母と作者と、それぞれひとつ気持ちが通い合って、そのなかを夏の明け方の静かな刻が流れているのである。こういう落ち着いた句を得て作者は境地をいちだんと深めたといえよう。

夕端居 齢の中に妻を見て

木附沢麦青

「齢の中に妻を見て」には、自分の齢に重ねて妻の齢を見ているまなざしがある。無論あたたか味の添うまなざしである。そのあたたか味は、作者と妻をつつんで流れて行く歲月へ心をひらいて肯っているところに生まれている。齢を詠いながら年寄りじみたところがなく、かえって爽やかなのもそのためであらう。そこに作者の面目を見る。

鼻 寄 せ て 来 る に 任 せ て 馬 洗 ふ 富田みのる

作者は今治の人。この句の背景には夕風の瀬戸内がひらけているのであろう。おだやかな背景にふさわしくこの句もしつとりとした味わいを持っている。掲句、鼻をすり寄せて甘えてくる馬のなすがままにさせているのである。粟飯原孝臣の馬の句にとらえどころの鋭さがあつたのに対して、この句には状景全体をあたたかく包んでいる作者のまなざしがある。この句の捨てがたい味もまた、そこにあるといえよう。

夜 の 秋 を 寺 の 子 竈 親 竈 原田 桃里

大きな土間の厨である。並んでいる大きな竈と小さな竈を作者は親子に見立てた。ほほえましさを誘う見立てである。むろん厨ごとはすでに終わって明日のためにきちんと片付けられている。焚かれていない竈だけに並んだその様が神妙に見えたのであろう。「夜の秋」の季節がしつとりとした雰囲気、厨の薄暗さに落ち着きを与えている。

銀 河 の 尾 追 ひ 来 て 島 に 泊 り け り 久保 草風

この島、どこの島とことわっているわけではなく、またどこの島でもよいようなのだが、不思議と佐渡の大きな黒い島影が目につかふ。おそらく銀河と島から、芭蕉の「荒海や佐渡によこたふ天河」が連想されるからであらう。「銀河の尾追ひ来て」は船窓にずっと見えていた銀河の状景であらう。やがて島影が黒々と目の前に迫り作者は船を捨て宿へ夜道を辿る。いま宿に横になって目をつむるとそういった状景がまざまざと頭に浮かんだのであろう。旅愁を強く覚える句であり、この句を通して芭蕉を呼び起こす趣が一層旅愁をかきたてている。

ひ と 眠 り 干 草 返 し き た る 香 に 太田 土男

のびのびとした句である。干草の香を身にとりこめてこれからひと眠りするのである。充たされた眠りにはおそらく夢もあるまい。健康な眠りである。この句、倒置法をとっているが、そのことが健やかな眠りを一層印象深いものになっている。

大櫓を匍ひまはる火や山の暮れ 菊川 芳秋

国東での作。山の暮色が濃くなるなかに、囲炉裏の櫓の火がひとときわ赤々と際立つ。櫓火の細部まで目に映えるのである。「大櫓を匍ひまはる火や」は、吸いつけられるように櫓火を見つめている作者の目が生んだ表現である。この句を読む者もまた目にいっぱい櫓火をひろげる。単純化されているだけにこの句、読者を引きこむ力があるといえよう。作者は主情的な作風を特色とするが、掲句は持てる写生力を充分発揮した作といえよう。

養はれ鮎 圀となりて川を知る 山上カヨ子

あわれを覚える句である。川を知らずに養魚地で育った鮎がはじめて本来の生のある川を知った。しかしそれは生き生きと自由に川の感触を楽しむ姿でなく、圀鮎という悲しい姿としてであったというのである。この鮎に疎外された生を見た作者の目は鋭い。目というより感性の質の問題であろう。訴えているのはこの鮎のあわれさだが、この句から人生の不条理に思いを及ぼす読者があつても不思議ではない。掲句にはものの見方、感じ方に深みを加えて一歩境地をひろげた姿がある。

昭和五十五年

古稀近し雲の端より柚子をもぐ 近藤 一鴻

作者の作風は境涯を反映させながらこまやかな情の表出に特色があるが、掲句など茫洋とした思いを加えて俳境のひろがりを見せている。「雲の端より柚子をもぐ」に仙境にあそぶ趣を覚える。林火先生との師弟関係に築かれて行った齡のゆたかさを思うべき作であろう。

石榴食べ終ふや華麗な秋過ぐる 鹿山 隆濤

「華麗な秋過ぐる」には、この季節を自分のものとして手にとり身をもって味わうことの出来なかつた悲しさ、もどかしさが籠っている。「華麗な秋」に、秋を遠く見遣っている気味合いを覚えるからである。単なるレトリックの面白さを味わうにとどまらず、一句にこもる作者の心を汲みとるべき作である。「石榴食べ終ふや」は作者のその思いを切実に負っているといえよう。作者は翌五十六年一月、世を去った。その作はおおむね病臥の境涯を出なかつたとはいえ、つとめて身邊に変化を求め、心の新しさをねがってきた俳生涯は惜しまれるものがある。

なにもかもうまし 新米山と盛る

松田 雄姿

微塵の飾り気もない。巧拙を問ういとまのないほどの迫力は虚飾なく言い切ったところに生まれているのであろう。新米の美しさ、豊かさを詠んだ句は多いが、食欲とむすびつけて俗を抜けた句は珍しいと言ふべきである。この句の新米は作者の健康とともに美しく映えている。

寒ければ 背ナに 弾む子 宥し置く

斉藤千代子

この「背ナに弾む子」はお孫さん。「寒ければ……宥し置く」の対応に心の機微に触れる働きがある。そのことが不自然さを感じさせないのは素直に詠まれているからである。

炭の 尉灰に ならして 初昔

芦沢ゆきこ

「初昔」は正月に去年をかえりみて言うこと。いま過ごしていた時間が年が変わると同時に昔になったという微妙な時の推移をあらわしている。語感もやわらかい良い季語だが、生かすのはなかなかむずかしい。掲句は「初昔」が自然に生きている作である。火鉢を前に年の夜を送

りながら、手すきびにならして灰に初昔を見ているのである。無表情とも見える灰の表面も作者の心のいろに染まっているような趣がある。この作者も翌五十六年四月、世を去った。俳句という自ら選んだ伴侶が最後まで作者とあったことに或るやすらぎを覚える。

軒に 吊る 塩 鮭 翳り 山 迫る

市川 翠峯

作者の郷里は上州草津。郷里に帰つての嘯目であろうか。的確に切りとった構図のなかに、山国の冬の日暮れのわびしさが忍びこんでいる。作者の俳歴は古い。ものの的確にとらえられていて一句の密度の-high ことが特色。

山 大いに 笑ひて 風を 起しけり

松崎鉄之介

「山笑ふ」の季題は「春山淡冶にして笑ふが如し」にもとづくが、季題自体がひとひねりしてあるだけに使いようによっては厭味が鼻につく。掲句はまったくさっぱりと詠ってけれん味がない。一見つかみどころのない句とも見えるのだが、この句に巧まざる俳味が生まれている由縁もまたその点にあらう。

(宮津昭彦)

浴身に白梅の香の染みやすく 田口 俊子

一切の雑用から解放されてしんと自分を取り戻している作者を感じる。やさしく、女性らしく、ともすれば情趣に溺れ勝ちな材料を白梅の凜とした香りで引き締めているのがよい。この梅、壺に活けられたものかあるいは盆梅か、いずれにしても春さきぶれの早梅といわれる種類のものであらう。俊子さんの句はいつも嫺々と優しい。しかしその中にどこか江戸前の背骨の正しさが感じられるのだが、この句などその代表的なものと思う。

焼 畦の太く屈きし 開田 碑 竹中 龍青

開田碑は、山野であつた所を開墾し水を曳き田にするまでの先人達の汗と祈りの記念碑ともいえよう。何年か経ち田も畔も落ち着く頃は、この碑もおそらくもう日頃は忘れられた存在になつてゐると思われる。春に先がけての畔焼のあとが太く黒く伸び開田碑にとどいていたという状景、誠に鮮明。省略のゆき届いた故の力強さであらう。

火山弾と柿を机上に据ゑて読む 森田 博

この火山弾、森田さんにとって大切な旅の思い出にもち帰つた石であらう。既に燃え尽き半ば瓦礫と化した火山弾。今、つややかに充実している柿。そして読むということにより、これから次第に深まり、充たされてゆく自分。その過去・現在・未来をつなぐ要が「据ゑて」であらうか。「井上三千女さんより柿を送らる」のあることも、前書なく充分味わたる句であるだけに何やら楽しげで、よき挨拶句である。

ぬくもりを肌の艶とし薬喰 中村 純子

丹波篠山で関西新年句会の行われた折のもの。外は小止みない雪であつたが、ぐつぐつと煮えている猪鍋を囲んでの談笑は楽しく、灯のいろまであたたまる一刻であつた。「肌の艶とし」と捉えた所が女性らしい実感と思う。

奴の国のほむらとなりて椿落つ 小熊 一人

博多湾から玄界灘に向き伸びる岬は「海の中道」と呼ばれ志賀島で海に落ちる。ここは「元寇の役」の古戦場として知られている。昭和になって「漢委奴国王」の金印が出土された。この句、「奴の国」という何か物語を秘めている固有名詞が大きな役割を果たしていると思う。椿の紅が南国の濃い潮に落ちてゆくさまを「ほむら」なすと感じ、異郷の古戦場にねむるつわものゝ霊に深い哀悼を捧げている作者がいる。

わが生の戦後に永し桜しべ 仲田喜三郎

戦後四十年の感慨を、「桜しべ」に託したのがしみじみと落ち着いた味わいを生んでいる。「桜葉降る」には夢のあとさびさびとした平常心の味がある。あの戦時という阿修羅めいた日々を人生のどの時代に過ごしたかで、その人の運命や人生観が大きく変わってしまった例を数多く見て来た年代のものには、ふと足を止め、ふり返りたくなる一句である。

晴耕の筍掘りの和尚さま 竹腰千恵子

いかにものびやかなタッチで「和尚さま」の俗語がびたりとはまり、俳諧味がただよう。ちなみにこの和尚さまは浜松の遠藤止観さん。同じ号に「熊野の藤見て来し」といふ女人かな止

観」があり、英子さん・純子さんと池田の宿に熊野絵巻を見に行った折のものと書く。いかにも千恵子さんの好みらしい熊野絵巻や藤の花では句がのこらず、思いがけぬ処でこの収穫があったということに私は出合いの妙を感じている。

看とりつつ卯月なかばと憶ひる 犬飼 久子

私にとって俳句は祈りです、と久子さんはよくいう。ご主人が体調を崩されてから吟行にも思うように出かけられぬ一時期があり、この句もそんな折の寂寥感がひとりごとのように口をついてそのまま句になったのであろう。卯月、卯の花、卯の花腐し、陰暦四月頃の翳りを帯びた季語がうまく入って、とり残されたようなさみしさが直接訴えられるより余計にしみじみとした後味をのこす。

夕蛙素足はじめのたよりなき 黄川田美千穂

美千穂さんの句は、その飾り気のない人柄のまま肩肘張らず親しみ易い。息が楽なのである。この句も微妙な季節の移り目を女性らしい感覚でとらえ、ナイーブで優しい。何の材料もない。いわば白湯の味である。さっぱりと、それでいて馥郁とした後味がのこる。「夕蛙」が動かず、

また「たよりなき」とはよく選ばれた言葉である。

信篤き国に來たりぬ花楷樹 松崎鉄之介

發表以来、多くの人の共感を呼びさまさまの形でとり上げられて來た作品である。信義、信頼、信節など、信の一字は対人關係に不可欠のものであるが、これが国となるとまたスケールが違ってくる。その後、重ねての訪中作品に中国は主宰の詩の故郷としての印象を強くしているが、その底流に密度の濃い歳月が遠く据わっていることを想わずにはいられないのである。

犇きて青葦まじるもの許さず 増田達治

「まじるもの許さず」と強く言い切ったことで純粋な青一色の葦原が目に見えかぶ。そこに立つ作者さえ拒否されたような青の世界、風の世界である。「犇きて」の視覚の外に風の音、水の音が感じられ一その涼をそそる。自分より背高い青葦原にまぎれゆきながら、作者も次第にいったんの涼しい葦になっていくような妙に孤独で澄んだ時間を感じるのには、一句にぴんとした声調の張りがあるからであろう。水際から葉先まで青ひとすじの葦のように、この句も無駄がなく勁い。

積乱雲登橋札の百の帽 下田稔

海の女王といわれた練習帆船日本丸は横浜市三菱重工のドックに繋留され、見学者で賑わっている。この句はその日本丸現役時代、横浜入港の折の句と思う。四本マスト一杯の帆に風を張り帆走する姿は、乗組員の若い生徒さんの姿と共に夢があり詩心をそそられる。「登橋札」は、入港、出港、洋上ですれ違う時の挨拶に使ったという。動詞を一つも使わず名詞だけで要素をびたりと定めた所、下田さんらしく見事である。

朝の僧南瓜の蔓を叱りをり 大串章

伸び盛りの子供のように好き勝手に這いまわり旺盛な生命力を見せる南瓜の蔓と、飄々とした御僧との対照が面白く滋味がただよう。「叱りをり」の措辞が何とも楽しく、御僧の人柄、風貌などもここからいくらかでも拡がっていく。今日もまた暑くなりそうな朝曇りのひととき、一陣の涼風のような爽やかな作品と思う。

天草海女銭が溜まれば旅に出る

濱本 晩生

何処の漁村にもいる陽気なたくましい海女さん達であろう。銭という言葉には生計より「ほまち」の気楽さを感じられる。浜辺から路地までいっぱいに干された天草の匂いの中で、秋風のおとずれと共にやって来る旅の話のあれこれに花が咲いているのであろう。きらきらした海と汐の香と健康な笑い声が一句から湧いてくる。

命淡し打水を日々のこととして

田中 灯京

「命淡し」の命は人間五欲であろう。何ごとにも執せず今日の平安を淡々といとおしんでいる様子が打水の呼ぶ涼風と共に清々しく伝わってくる。

一生のどのあたりなる蜷の道

水口 郁子

水口さんは女性には珍しく常に覚めた目でものを見ることの出来る人で、時にこのような句を示しどきりとさせられてしまう。「一生のどのあたり」といわれるとスピードの切札をひらきと見せられたようにたじろぐものがある。同時作に「父倒れ寸にはじまる片蔭や」があり、水口さん自身の気持ちの揺れ、惻々とした不安がこの秀作を生んだのかも知れない。林火先生がこの句を激賞しておられた。

天の川麻は香りて刈頃

大川つとむ

麻栽培も今はむつかしいので、関東なら栃木県鹿沼市あたりの風景ではなからうか。大麻というイメージが違って来てしまうが、御祓の折の蒔い草、また産着の麻の葉模様など麻は古代から皆、淨らかな祈りにつながる。鹿沼のあたり、まだ人の灯も少なく闇も深いであろう。銀漢の下、いつせいにそよぎ立つ麻畠はかぐわしく、また清浄である。

生涯を旅にパウロのごと日焼

横溝 賢介

「ある巡回伝道師に」との前書がある。従ってこれは賢介さん自身のことではないが、どうしても賢介さんの面影の重なってしまう作品である。私の友達が信仰と俳句の両立に悩んでいた。若い賢介さんはこの問題をどう対処なさっているか。賢介さんの言葉の「聖日礼拝か吟行かで悩んだ末、私は意を決して吟行を捨て去った。その結果、私の俳句は大いに変わった。俳句の

中に安らぎが籠るようになったのである」というその辺に鍵があるのではあるまいか。不信心な私にも味わい深い言葉だと思ふ。

盆 帰 省 鮠 が 素 早 く な り る た る 鳴 戸 海 峽

遺句集となつて上梓された『滝音』の掉尾に置かれた句である。水影も風音も澄み初めたふるさきに「鮠が素早くなりゐたる」と見た海峡さんの目はあたたかくなつかしい。林火先生はその序文に「句集名『滝音』は郷里の那智滝のことであろう。句集の最後が『盆帰省鮠が素早くなりゐたる』であることを思えば彼の魂はふるさとに帰つたと見たい」と結んでおられる。

船 津 屋 に 月 の 芒 を 抱 へ 入 る 佐 野 美 智

「船津屋」のイメージの占めるものは大きいが、「抱へ入る」ものが月の芒とはいかにもやさしく、月の座より恋の座に置きたいような翳りを添えている。一句の調子がかろやかで苦渋のあとはいささかも見られぬが、これも佐野さんらしい周到な心用意の末のたまものであろう。

百 疊 の 爽 気 に 祝 ぎ の 灯 と な れ り 元 吉 竹 瓶 子

十月十日、箱根小涌園における林火先生の喜寿祝賀会で鍛錬会賞を受けられた折のもの。作者にとつても忘れ難い記念すべき作品であろう。先生はこの句について臨場感の大切なことを「句作りはのこすべし。孕句出たるは出る品うるはしからずとせ」の芭蕉の言葉からお説きになられている。「百疊」がよく「爽気」がよく、当夜の昂りが生き生きと伝わってくる。

(中川美穂)

— 昭和五十六年

住 む こ と の 柿 年 々 の そ の 色 に 宮 津 昭 彦

土地に親しみ、住処に馴染んでくらす人の心がねんごろに詠われている。春には木の芽がひかり、夏には蟬が鳴きしきる。そして秋には柿が懐かしく色づくのだ。人は、そういう季節の推移のなかで毎年確実に年を取っていく。「住むことの」には住み古ることへの感慨が、「年々の」には歲月への認識が、「その色に」には自然への信頼が籠められている。この句は、「柿」

を核^{コア}として作者の人生観照のごときものが語られていると言つてよい。

外輪山より湧きいでて鳥渡るかな

川村 紫陽

前年十月、箱根において演鍛錬会がおこなわれた。作者はこの時好調で、上掲作のほかにより鍛錬会賞を受賞している。「外輪山より」の一句は、大景を爽やかに言いとめ、ベテランの力を十分に發揮した秀作であつた。

菜を洗ひ水喜ばす女の手 毛塚 静枝

「水喜ばす」とは主観の強い言葉であるが、菜洗いの辛さと、菜洗いの充実感を共に知っている女の人の言葉であらう。冷たい水のきらめきと、赤く染まった女の手とがあざやかに見える。

竹さ揺るさへ冬麗の谿のこゑ 荒井 正隆

端正、静謐の一句である。冬麗の谷の静けさ。竹叢のかすかな動き。その幽かな音を「谿の

こゑ」と聞きとめたのは、作者の充実した詩心にほかならない。荒井氏の端正にして切れ味ずるどい俳句は、氏の並々ならぬ修業の中から生まれ出てきたものであらう。

床踏めばきしみて冬のひそみる 田中 螺石

「冬のひそみる」が独特である。床の鳴る音に冬の存在を感じ取っているのだ。どこかとぼけた味を藏しながら、決して軽い句ではない。庶民派の螺石さんらしい句であり、冬の厳しさを知っている人の句である。

柿色に夕焼柿はくらくなる 井上三千女

山国の夕暮れがなつかしく言い止められている。西の雲は真つ赤な夕焼け。熟柿のような色である。かたや眼前の柿はすでに暮色をまとい薄暗い。夕焼けの明と柿の暗とが対照的で印象深い。井上さんは柿が好きな人であるにちがいない。

連風の末尾が波音よろこべり 金子 篤子

青空。白波。太陽にきらめく風の列。「末尾が波音よろこべり」がいかにも大らかで快い。作者の心の弾みがそのまま一句に乗り移ったような句である。

風集めるし蘆けふを刈られけり 中川 美亀

青々とみなぎり、そうそうと風に鳴っていた蘆原。それがいま枯一色となって刈り取られているのである。作者は、季節の推移と人間の営みのなつかしさにしばし時を忘れて蘆刈に見入っていたのであったように思える。「風集めるし」が一句に奥行きをあたえ、「けふを」が作者の詠嘆をよく表している。

御遺文に雪の佐渡あり寒行す 遠藤 止観

作者は僧侶。みずから寒行にはげんでいるのである。寒気きびしいなか、作者は、題目をとなえて歩き廻りながら、日蓮上人の「御遺文」を思いだしているのだ。日蓮上人は、文永八年、佐渡流罪に問われ、二年余をその地ですごした。飢えと寒さに苛まれながら、日蓮上人はそこでいよいよ思案を深めたと言われている。「御遺文」には、寒風厳しく、雪の激しい佐渡の有様が出てくる。作者は、荒寥たる佐渡を思い、日蓮上人の不屈の精神を思っているのだ。そし

てそれをみずからの力として寒行にいそしんでいるのだ。

伊勢神楽きて鴨翔たす湖の村 谿 昭哉

冬麗の湖。神楽の笛の音。飛びたつ鴨。平和な湖の村がおだやかな呼吸で詠われている。湖のむこうには、雪を被った山々も見えてくるようだ。長い伝統をもつ「伊勢神楽」と「鴨」との出会いが、あたたかいまなざしの中で親しく言いとられている。

延着列車どつと白息吐き出せり 石田 章子

作者は新潟県在住。定刻を過ぎて列車が到着したのだ。「延着列車」は乗客でいっぱい。「どつと白息吐き出せり」が北国の駅の雪の降るころの慌しい有様をよく描きだしている。

豪雪対策公家の軍議に終りけり 竹田 恵示

「降りつづく雪成す術なし」の前書がある。手の打ちようのない豪雪に対し「公家の軍議」を持ち出したところにこの句の眼目がある。公家の軍議は所詮有効打を打ちだし得ないのだ。作

者もまた新潟県に住む人。雪深い土地の人でなければこういう句は生みだし得まい。この句には作者の深い嘆息がこもっている。

こばれたる狐の檻の水凍る 久保 龍

狐の檻の中に氷を見出した作者の眼は鋭い。無表情に檻の水を描きながら狐の衰れを感得させる。久保氏は、飄飄として親しみ深い人柄だが、時にきらりと鋭い句を示す。長年俳句にかかわってきた人の手練のわざを私はそこに見る。

初 漉 きの 紙 一 帖 は 雪 の 嵩 内海 弘喜

南海電車が高野山に近づくころ、右手の谷間に古い集落が見えてくる。高野紙で有名な古沢である。全盛期のころはほとんどの家が紙を漉いたというが、今は当時の面影を見るべくもない。内海弘喜さんは高野山に住む。かつて私も弘喜さんのお伴をして古沢の紙漉を見に行ったことがある。この句、「雪の嵩」が哀れである。憂いをおびた和紙の白さが目に浮かんでくる。この句を読むと、私は、古沢のさびさびとした冬空を思い出し、高野山の真つ白な雪景色を思い出す。

紅 梅 の 中 へ 一 歩 の 夕 ぐ ころ 高澤 良一

柔軟な資質と清新な詩心のみえる作である。紅梅の中に歩み入るのは作者の心そのものだ。林火先生は、高澤君は情趣に生きる人だが情趣が情趣で終わらないよう何かをつけ加えるべきだ、と言っておられる。高澤氏への期待が大きかった分だけ、高澤氏への課題もまた大きかったと言わねばならぬ。これは単に俳句のこととしてだけではなく、人間の問題として林火先生は高澤氏に語りかけておられたのであったように思える。

ガラス曇るまで花桃の入荷せり 納 漠の夢

入荷した桃の花の精気で、花屋のガラスがくもるほどだと言うのである。このいきいきとした感受性はとても明治三十八年生まれの高齢の人とは思えない。漠の夢さんは、今も句作に熱心で、時として飄飄と旅に出る。旅先で、いったい何を見つめているのであるう。それは、おそらく、この人生というものとかかわりのある何物かであるに違いない。

天地の光り 巢蕨にありぬべし 村越 化石

村越化石氏が全首になられてから久しい。しかしなお氏は宮々として句作をつづける。その精神力は感嘆のほかない。化石氏は、俳句の上で実に大きな仕事を成しとげつつある。上掲「天地の」の句についてはかつて触れたことがある。巢蕨は、そこに新しい命が生まれ、育っていくところ。その巢蕨に恵みの春光は耀いているに違いないと化石氏は言うのだ。その精神のすこやかさ。化石氏は、天の恩寵、地の祝福を思っているのだ。

桜 前線 日曜 どこか祭なり 八牧美喜子

桜。祭。日本人の暮らしが懐かしく言い取られている。桜の咲くころの日曜日、どこかの町村で必ず祭が催されているというのである。あたたかいまなざしの作であると思う。北国では殊に桜も祭も待たれることであらう。

蛇 穴を出づ 大寺に生を享け 佐野 美智

蛇はどちらかと言えば忌み嫌われる動物。しかし、「大寺に生を享け」というように詠われると、何か人も蛇も同じいきもの同志という感がしてくる。人も蛇もこの世に生かされていることに変わりはない。春とともに草木は萌え、動物は活発に動きはじめる。蛇もまた循環として世に姿をあらわすのである。

白きボート 軽々かつぎゆく立夏 田中 英子

青い空。碧い海。明るく軽快である。白いボートが立夏の水面にかがやく。「軽々かつぎ」と言ったところに若々しい動きが見える。

上ミ 七瀬経し 鵜 簀を足しにけり 中戸川朝人

岐阜県長良川で濱同人鍛錬会が催された時の作。土地の山下鵜匠から鵜の習性や鵜装束のことなど詳しく話を聞いたことも今では懐かしい。流れを下って来た鵜舟の簀に新しく薪を足すのだ。簀火は勢いよく燃えあがり、あたりを華やかに照らし出す。「上ミ七瀬経し」に中戸川氏らしい踏み込みがある。作者は、鵜舟がはるか上流にあったときから一心にそれを見守っていたのだ。

円空仏ひとり笑ひに山蛙 恩賀とみ子

円空仏のあの独特の表情。素朴で深い笑い。円空という人は大きな祈りを胸に抱き込んで全国を歩き廻ったのであつたらしい。そして激しい気迫で数多くの木仏を彫つたのであつたらしい。上掲作、「ひとり笑ひ」と「山蛙」の配合が絶妙である。青々とした山の空が見えてくる。恩賀さんの作は、従来どちらかと言えば人間の煩惱をうたい、女人の業を示したものが多かった。しかし、この句にそうした粘っこさや暗さはない。この句はどこかふっきれた闊達さを示している。

泰山木一花にて風司どる 波多野蟻仗

泰山木の花は、香気が高く、見事な白さである。緑の中のそれはまさに王者の風格である。涼風。花のゆらぎ。実際には風が花をゆするのだが、作者は花が風を吹かしむると言うのである。大輪純白の一花が風を宰領すると言うのである。「一花にて風司どる」は、泰山木の美しさにささげた作者の讃歌にはかならない。庶民の哀歎を詠って独自の句風を示す波多野氏は、「泰山木」の句のような詩情ゆたかな作もまた成すのである。

だんだら日除海の土産は水の中 岡田 鉄

照りつける太陽。段だら縞の日除。店には鮑や活魚など海の幸が売られている。「海の土産は水の中」とびしゃりと言ひ据えたところにこの句の素晴らしさがある。水槽の白い泡立ちも見えてくるような作である。この句は杉の実句会の吟行会で鶴原をたずねた時の作。

日焼せし子を生みさうな妊み海女 小谷部東吾

海女をうたつて出色の作。海女は身籠つてもたくましくすこやかである。褐色の日焼は褪せることがない。それにしても、「日焼せし子を生みさうな」とはよくも言つてのけたものである。闊達自在なこの発想は見事というほかはない。母も子も明らかに太陽に嘉されている。この句もまた杉の実句会鶴原吟行会での作である。

遠投の弧にとらへたる鯛雲 甲斐 虎童

大景を捉えてさわやかである。「遠投」はこの場合野球ボールの遠投と受けとめておきたい。

浜辺か運動場で大きくボールを投げているのだ。白球の描く弧があざやかに鯛雲の一角をきりとる。「遠投の弧」という無駄のない言葉づかいに作者の直截な詩心を見る。

帯解の駅 コスモスの吹かれざま 猿橋統流子

「帯解」という地名と「コスモスの吹かれざま」という措辞とが微妙にひびきあう。コスモスの可憐でなやかなさまが一句に優しみを添え、そこはかとない旅情のただよう作である。

のむ酒のみな水漬となるごとし 三浦 紀水

冬夜一人で盃を傾けている男。酒は飲めども心たのしまず孤影は深まるばかりである。飲む酒がみな水漬になるようだと哀れきわまりない。この句は『万葉集』の貧窮問答歌を思い出させる。山上憶良は千二百年余の昔も、冬夜一人で「糟湯酒」をすすりながら鼻をぐすぐすいわせていたのである。個性の強い句風に深まりを見せつつある紀水氏の作品は注目される。

天 高し 蛙に笛吹く童子 脇本千鶴子

やさしく、さわやかな一句である。「蛙に」の一語により「童子仏」の位置がはつきりし、周辺の情景が彷彿としてくる。林火先生は「この句は直接大和という地名を用いていないが、大和をさながらに伝えてくれる」と述べておられる。この言葉は、「童子仏」の一句をふくよかに解釈しながら、安易に地名に頼らずその土地のものをしっかりと把握することの重要性をも教えてくれる。

(大串 章)

——昭和五十七年

咳きに咳き火の付きさうな影法師 櫛原希伊子

火が付きそうに咳くという表現は、とくに新しいとは言えないが、影法師をクローズアップしたのは構成のうまさである。この影法師は実体よりもいきいきと息づいている。影法師であるだけに咳きに咳いて揺らいでいる姿態が一層あわれである。「咳きに咳き」と重ねて、いつ咳き終わるともしれぬ苦しさを表現し寸分のすきもない。表現が正確ということは感動が正確ということになるのだろう。

紅梅や梳きて磨きて丹波牛 土田祈久男

春の訪れを思わせる明るなおおらかな句。丹波牛の真つ黒い艶と紅梅のあでやかな色との配合が妙。一幅の絵になりそうな情景である。俳句は具象が必要であるが、単なる絵画であってはいけないのだ。その裏にある眼に見えない生命力というか、本質というか、それを掴みとらなければならぬ。「梳きて磨きて」に日夜丹波牛を育てているねんごろさ、そして作者の生類へ寄せる哀憐の情がうかがえる。

ゆたかなる湯氣に居たくて大根煮る 鶴沢千恵子

主婦冥利につきるといふか、このような安らぎの世界もあるのだ。逃避的行爲による心の安住はいろいろあるが、前向きの姿勢で「大根煮る」というきわめて日常的な動作の中で心のしこりを徐々にほぐしていく。そしていつか作者はゆったりとした平常心をとり戻すのだ。何の銜もない素直な感情の表現である。ちなみに作者は華道教授である。

紙つぶて撒きしごと冬白浪は 吉野 義子

紙つぶてを撒いたように辛夷が咲いているとか、植物の比喩は割によく見るが、白浪を紙つぶてにたとえたのは意外性があつておもしろい。紺青の海一面にきらきらとかがやいている白浪を見て、なるほど紙つぶてとは適切な比喩であると感心した。やはりこれは冬の白浪である。

柿ひとつむいて常磐線夜行 甲斐 虎童

常磐線という何の変哲もない退屈な線という概念がある。しかもその夜行である。乗客も少なくかなり空いているような雰囲気だ。柿を一つ剥いて同行の人（奥さんかもしれない）と食べただけ——。あとはまた夜の静けさにつつまれる。この場合、柿のもつ暗い冷たいムードがぴったりで「常磐線夜行」と名詞止めにして突き放したような措辞は的確に伝びしき、空虚感を描き出している。淡にして慈、なかなか屈折のある句である。

くわりんの実空へ空へと笑ひ声 田中 萱子

一切を省略して模槿の実と笑いだけで底抜けに明るい情景を描写している。おそらく作者もふくめた若い女性数人の玲瓏とした笑い声であろう。澄み切った秋の青空へまっすぐに上っていく希望に満ちたはずんだ笑い声である。「空へ空へ」という繰り返しによって果てしなくつくづく笑いが想像される。見上げる頭上には黄色い少しでこぼこした模槿の実が陽にかがやいている。熟れた模槿の充実と青空へ吸われていく笑い声の照応は感覚的にひびき合い、景と情とがほどよく結ばれている。

山守りの歳暮の礼に酒五升 内海 世潮

作者は既に知られている高野山南院の住職。その持山の一つに、本尊波切不動への祈願料として後醍醐天皇から拝領した観音山がある。山守が年末の挨拶に来たお歳暮のお礼として、お酒を五升持たせて帰したというのだ。さすがに大寺、なにこともスケールが大きい。お酒の好きそうな豪快な大男の山守を想像する。歳末の寺院のあわただしさもうかがえる。

凍む国の凍むまじく瘤ふやす木よ 持田 石映

「凍むまじく瘤ふやす」には、暗喩性を感じる。若木ではあるまい。かなりの年輪を感じさせ

る。凍みる国を訪れた作者が、まず自分自身、かじかんで萎縮するまいと緊張する。そういう心の昂りが老木の瘤を見たときに「凍むまじく」という思い入れの深い表現を得たのであろう。作者の心は老木と握手しているのだ。凍みる国に対するこの上ない存問の句となった。

夢二 展 出 て 繭 玉 に 触 れ ゆ く も 重松 沙代

作者は色彩的に豊かな句が多いが、この句もその一つである。竹久夢二のうっとりするようなムードの中から抜け出て現実の街を歩きながら、まだその雰囲気から覚めず、どこかの商店の彩美しい繭玉にそっと手をふれていく。その弾んだ心を「繭玉に触れゆくも」という動作によって見事に具象化している。

蘆刈の葉騒となりて消えゆけり 神長 裕子

さくさくと音が聞こえるだけの全く孤独な作業である。何の理窟もない素朴なくらしのひびきである。そして日がすっかり落ちて手もとがあぶなくなると、一人減り二人減り帰っていく。「蘆刈の」の「の」は切字的な役割を果たしている。葉騒を残して消えたことにより一層孤独の男の背中が強調される。

手拍子も楽器のひとつ雪まつり

村上喜代子

「雪まつり」という大きな行事を詠みながら行事にふりまわされていない。しっかりと自分の眼で見てユニークな把握をしている。手拍子も楽器の一つであると見た新鮮な眼は柔軟な心の表れである。自分もその雪祭に土地びと同じ心で参加しているからである。なつかしい気持ちをもって対象を切りとって来ているのだ。雪祭に集まってきた土地の人たちと作者とのあたたかい交流の中に生まれた詩として昇華されている。

日長くして食ぶる用なき口結ぶ

西村 公鳳

「胃潰瘍にて入院」の前書がある。ただでさえ日の長い病院生活であるのに食べる用がないとはどんなに淋しく退屈な日々であることか。言いたいこと、訴えたいことが沢山あるであろうが、すべて削りに削ってただ一つまぎれもない中核を表出しているのだ。多くを語らず作者の心位の高さを感じさせる句である。

座敷杖とも妻たのむなり仏生会

天野 武雄

天野さんは全盲である。何をするにも奥さんの手を借りなければいけない。本当に座敷杖のように恃みにしている奥さんに対する感謝の気持ち、仏生会というおらかな慈味のある季語と結びついて、ふっと口をついて出た句であろう。悲しいことにこの句を作られた翌々年、奥さんは心臓病で急逝された。

海鳴りて雁風呂のすぐさめにけり

八牧美喜子

津軽は現在もこの人が魅かれている土地であり、かなりの力の入れようである。雁の供養のために木片を拾って風呂を焚くという民話がこの地方に残っている。そういう古事を確かめたくて、ずいぶん歩いたそうだが、事実としてはなかったようだ。しかしそのようなことに心魅かれるというところがいかにもこの人らしい。「すぐさめにけり」に哀れさがあり、雁風呂に対する作者の思いがこめられている。うっかりすると埋もれてしまいそんな季語を発掘しようとする意欲には頭の下がる思いである。

水中花港まつりの灯に買へり

伊藤 京子

横浜の港まつりとすれば、山下公園あたりの夜店に並べられた水中花であろうか。海風を受けながら、水中花の開いたときの色や形など想像して、あれこれ選んで買う楽しさは童心にかえったような郷愁をそそられる。よけいなことをしゃべらず、言葉を修飾せず、海と水中花との微妙なひびき合いのみを眼目とした句である。

諸星の軌跡覚えて夜干梅

村上一葉子

諸星の軌跡であるから、いろいろな星座の位置、及び時間の推移による星の移行などをすっかり梅が覚えてしまったということであろう。夜干梅を擬人化して天体と結びつけたところがおもしろい。何とも軽妙な発想である。作者自身が夜干梅に没入して得た所産であろう。ときすまされた感覚である。

一生の一師みまかる萩の露

近藤 一鴻

「萩の露」は当然林火先生の御辞世句「先師の萩盛りの頃やわが死ぬ日」「残る露残る露西へいざなへり」「萩明り師のふところにあるごとし」をふまえて作られたものであろう。「一生の一師みまかる」は氏のみならずわれわれの胸ふかく永久に消えることのない思いなのである。

(金子篤子)

——昭和五十八年

鳥渡るごとくふるさと抜けしのみ

白井春星子

ハンセン氏病を得て、こころならずも捨てた故郷に対する思いに淡々と放下しきった清々しさがある。もはや最も逢いたい母はすでに亡く、家の代も替わってしまったであろう故郷である。鳥瞰して故郷をとらえているところに注目した。

孔明の死より長き夜三国志

杉本 寛

諸葛亮、字は孔明、蜀漢の宰相、劉備の三顧の知遇に感激して仕えたことは有名な話。忠義一途の人で三国志のなかでも孔明の死のくだりは圧巻である。秋の夜長に『三国志』は最もふ

さわしい読み物だろう。孔明の死は、蜀の建興十二年秋八月二十三日であると記されている。死の事実もまた曠野にびっしりと白露の降りた秋の夜であったと知ると、この句はさらに味わいの深いものになる。

大年の田水光るに禽あそぶ 下田 稔

年末年始にかけての「おくのほそ道」をたどる旅である。この句、日本海に面した北陸路の何処かで得たのであろう。逝く年の刈田に鉛色に光る水の色、そこに幾羽かの鳥が降りて何かついばんでいる。旅人の眼で見た北陸の大年の静謐と侘しさが、そくそくと迫ってくるようだ。凝視することに優れる、いかにもこの作者らしい句である。

顰戎覚めよと銭が錢搏てり 千賀 静子

顰戎、十日戎とも初恵比須ともいう。福神として信仰され特に商人に敬われている。この恵比須様は何故か昔から耳の遠い神様といわれていて、社前でお詣りしてまた社のうしろに回って、羽目板を叩いて「只今お参りしました」と大きな声で申し上げるのだそうだ。現世利益を願うさまが「銭が錢搏」つというお賽銭の飛び交うさまに活写されていて景氣のよさがしのば

れる。作者は幼い頃今宮戎のあたりに住んだことがあり、土地の習俗がごく自然に詠まれているのも頷ける。

雪吊に触れ米山の風鳴れり 堀田 政弘

雪吊は雪国の人々にとってはやっかいな仕事だが、見た眼にはまことに優雅な姿である。米山は越後有数の霊山で、漁民はこの山にかかる雲のたたずまいで天候を予知し、農民も守護神としてあがめている。芭蕉も市振の関へたどりつくまで暑湿の労に神経をやまししながら米山を仰ぎ見た筈である。作者もそうしたさまざまなことに思いをはせたであろう。「米山の風鳴れり」は、ただならぬ雪風であることを思わせる。

奉公の終へし地に住み一葉忌 水野 遼

多分「たけくらべ」に出てくる子供の一人のような少年の頃に故郷を出て、商家へ年季奉公に来ていたのだらう。年季が終え独立できるようになって住みなれた土地が気に入ったか、或いはお得意さんがあったのか、その土地に住みつくことになったのであろう、一葉の描いた世界に似た一編の小説のような句だ。

童顔のほかは知らざり賀状書 菅田 賢治

年賀状を書く相手というのは、かならずしも最も親しい人とか、先輩後輩とは限らない。この句の場合は、賀状を書きながら幼顔しか覚えのない、その顔を思い出して書いているのである。故郷にいる幼友達か、或いは親類の可愛がったことのある子か。作者の質朴な様子と、ほのかな愛惜がこの句からはたちのぼってくる。

故郷を恵方に置きて出稼す 中田 勘一

新春早々、家族から離れて一人他の土地へ働きにゆくのである。いそいそ行く筈もあるまい。まだお屠蘇氣分の残っている故郷のかたこ恵方であると思うのは、自然な感情である。そこにかすかな逡巡の思いがただよってくる。人間に対する温かい眼差しがあり、具象化の確かな作者であると思う。

成木 貢 大藁屋にて 子沢 山 甲斐 遊糸

大家族の大きな藁屋の庭の、多分柿の木なのだろう。子供達がわらわらと出てきて、木の傍で鉈か斧などで「なるかならぬか、ならねば切るぞ」とおどし、別の子が「なります、なります」と芝居がかって答えるのだらう。老人が笑いながら、それを見守っているかも知れない。いかにもこの作者らしいことなくユーモラスで平和な風景が好ましい。

雪掻きのまばらと見えて総出なり 宮津 昭彦

茫々とけふる日輪のもと、雪国人にとつてもつとも辛い作業の雪掻き。二階から這いだすようにしてこの作業を行う。多分冬期は一家の主人は出稼ぎに出てしまっているから、主な働き手は老人と女性の筈である。一見まばらなように見える。しかしよく見ると、彼の軒、その雪道にも懸命に雪を掻いている人の姿がある。「まばらと見えて総出なり」はよく見とめたと思う。

紅梅の如きところと師の朱筆 中澤 文次郎

比喩がまことに的確である。紅梅、それも開ききったそれではなく、ふくらみ初めたばかりの紅梅のように、ころころした林火先生の文字だった。添削の文字は、慣れない人からは何と

読むのか問われたこともあったが、拡大鏡で見ると先生の文字は、正しい崩しかたなので解り易く実に味があつた。あの朱筆をどんなに胸踊らせ一喜一憂して読んだことか。一途な性格の作者らしい句である。彼の世へ贈る作者のこの思いが、いたずらな嘆きではなく、さっぱりとした具象であることが佳い。

青き夜がありて峡田の虫簞 町田しげき

「青き夜」がこの作者らしく繊細かつ抒情的である。青稲の香ぐわしさと峡の夜を照らして燃える虫簞に幻想的な風景が浮かびあがる。いまは古稀も過ぎた筈のこの人の瑞々しさは、よほど精神が柔軟でなくては、かなわぬことであろう。美しい世界である。

青刈りと決りてをりし田を植うる 勝亦 年男

この句の青刈りは、おそらく稲が黄熟もせぬ頃に田が売られることになっているのか、或いは埋め立てられる運命にある田のことだろう。植える人はそのことを知りつつも先祖代々手塩にかけてきた田を傍観するにしのびなく、苗を植えるのである。神代から続いたこの動作は、日本人の血のなせるわざであり、神の来臨をそこに請うた習性ですらある。現実的にいえば無

駄な行為である筈なのだが、なおそうせずにいられぬ行為が悲しく清らかな共感を呼ぶ。

雲海に手繰りてザイル真紅 荒川 文雄

作者は登山に執する人。登山の醍醐味をこころゆくまで味わい、いくたびかの山行にかならず佳句をしめして我々を羨ませる。雲海のたちこめる岩場を真紅なザイルを命綱として攀じる、まさに男の世界である。真紅であるが故に、わが生命の綱の思いはさらに強く感じられる。まさに生命が洗われてさらに鮮明に輝く瞬間であろう。

星祭る生きの証しの傷ふやし 大川つとむ

「透析千回」の前書がある。聞くところによると、透析はマラソンをしている程に消耗し、たいへん気分が悪いのだそうである。その透析が千回といえは約六年間である、注射痕がケロイドのようになっていく。「生きの証しの傷」とは悲しいが、その苦痛も見せずにいつもおだやかである。対象把握の確かさと感覚の冴えには定評があるが、加えるに大人の男の持つ倦怠感がこの作者の句には色濃くただよっている。

山 動 く か に 麦 負 へ り 足 柄 男

小松原みや子

作者は山梨県生まれ。故郷へ帰るとかならず佳句をしめす。富士周辺の山稜地帯が詩心をはぐくむのにもっとも適しているのだろう。刈麦だけが動き出したように見えたのだ。簡潔な措辞がよい。句の背後に坂田金時があることはいわずもがなであろう。対象を的確に掴む写生力にすぐれた作者らしい句である。

大 阪 の 寸 土 に 蟬 の 一 樹 か な 広 岡 仁

多忙な医業の傍ら、各地の風土に深い眼差をそそぐ人である。この句も俗に土一升金一升といわれる大都会の一隅にある樹木にしきりに蟬が鳴いている。蟬は地下に埋まって数年、成虫となつて僅かに数日その命のかぎりを鳴く。その一樹あるかぎり、くる年も蟬は命の歌を唄うだろう。人もまたその木蔭で束の間の涼をとることだろう。小動物への理解と優しさを内に秘め、しかも表現は簡潔で余計な感情移入をせぬことでこの句は成功した。

鯛 雲 天 上 に 神 耕 す や 水 口 楠 子

ロマンの香り高い若々しい句である。地上に人は耕すのに余念がない、その空にたたなわる鯛雲のさまは、天上でも神が耕したのではあるまいかと思わせたのである。瑞々しい感受性であり、かかるナイーヴな句に、むしろ生きる勇気を得ることがあることを銘記したい。

(佐野美智)

— 昭和五十九年

威 し 銃 空 の 深 さ を 測 り を り 矢 澤 寿 美

青みをたたえた澄みきった秋色であろう。「空の深さ」という描写でそれは明らかだ。秋晴の空を垂直につんざくような銃音が消える。威銃が、空の深さを測っているのだという、間髪を入れない把握がここにある。「測る」は推しはかるの意、作者の観照にもかかわっている。一句の成立から推すと山田であろう。一読、作者の感覚の新鮮さが汲みとれるが、それは、情景のしっかりした把握と、ことばがよく咀嚼されていて、表現の吟味がゆきとどいていること

に由来する。

わが顔を水底に見し寒さかな 杉本 寛

荒涼とした冬の水べりであろう。実際には水面に映っているのだが、水面即水底と感覚するほどに、清澄な寥々とした動きのない水なのだ。「水底に見し」は、そうした無色の冬景色を思わせるに充分な、省略のきいたことばである。町中の喧騒から離れた、人をひとりにたちかえらせる静寂な場なのだ。恬淡とした境地の中に、日常の憂悶が覗き、作者の無聊が痛切に伝わる句だ。

竹耐ふる限りに撓ひ涅槃雪 櫻井 康敏

涅槃会は旧暦二月十五日であるが、現今では三月十五日に行われるところが多い。すでに仲春、その頃の雪はべたべたした牡丹雪が多い。「竹耐ふる限りに撓ひ」は、そのような淡雪が密着し合い竹の葉に積もり、もうこれ以上は耐えられない状態にまでに撓った竹の姿を言いとどめている。涅槃寺の一本の雪の竹に景を絞る、一念不動の写実の手腕を示した句。

風薫り空海の書の馳すごとし 上野さち子

空海の書を前にして「馳すごとし」と観入した。きっと筆勢も雄大で力強い書に違いない。青年時代の空海は山野を跋涉した修行者であったことが知れ、書は草聖と呼ばれ能筆家として入唐前から天下に名を知られていた。高野山の開創は空海の後半生の大事業となったが、その伽藍配置は全く破格の独創という。高野山開山後は永遠の瞑想の世界に入るわけであるが、正に時代の風雲児と呼ぶにふさわしい波乱に富んだ生涯であったのだ。そのような仏教界に雄飛した空海の軌跡を思うとき、「空海の書の馳すごとし」は千鈞の重みを具えて迫ってくる。

神仏を素直に信じ雑煮食ふ 加藤 亮

雑煮は本来は神に供えたものを食うことで、年神を祭る食事である。斎戒沐浴、新しい年の息災を神仏に願ひ雑煮を頂く。「神仏を素直に信じ」はやや古風ながら生真面目な作者の風貌も見えてくるようだ。作者は山梨の人、山国育ちの朴訥な人柄の偲ばれる句だ。

甚平着て 齢も洗ひざらしかな 小山 梧雨

着古した甚平ながら、洗濯がゆきとどいていて、小ざっぱりした感じを与えるのだ。「齢も洗ひざらしかな」の清涼感は、作者の歩んできた生涯そのままで。甚平も齢も「洗ひざらし」、ここに一句の眼目がある。酒好き、好人物、飾り気のなさ、この人の淡如とした人となりと思うと、誠にびつたりとした表現に思えてくる。

われと古りいそいそまはる 扇風機 田淵ひで子

年来の扇風機に寄せる作者の愛着のところが、「いそいそまはる」にねんごろに出ている。作者は信州安曇野に長く住む。会うと少女のごとき含羞と清純さを与えてくれる人だ。そういう無垢なところが捉えた柔軟な呼吸づかいが味わい深い。「われと古り」と言っているが「古る」ことにみじめさを感じさせぬのは、作者の徳によるものであろう。

風入れのごとくにひろげ形見分 大熊 輝一

作者はこの年の六月母堂を亡くされた。折から土用、母堂の持ち物であった一品一品に新しい追憶の感慨が湧いてくる。「風入れのごとく」が、母堂の生前の存在を清々しいものにした。形見分けの悲しい状況がしつかり捉えられていて味わいのある一句だ。

夜の湖をお山洗ひのはしりけり 荒井 正隆

吉田の火祭の夜を境にして富士山は冬ごもりに入るのだ。その日に降る雨を「お山洗い」と呼んで、山麓に住む人びとは、夏の登山者で汚れた富士が浄められると信じている。「六根清浄」と唱え登った、清らかな山にもどるのだ。作者の父君は、木曾御嶽、富士講の先達をつとめた人、そういう家柄に育った作者には幼いころから山嶽信仰のところが培われていたのである。「夜の湖」は山中湖か。富士を浄めた雨が湖上をさわやかに走り抜ける。爽涼感のみなざる句だ。

風邪神の旅立ちもなく居つきけり 川上なみ子

長風邪である。寝ていれば、何よりも早く治ることは分かっているが、主婦の立場であるとなんともいわず、つい起きて仕事をしてしまう。治りかけた風邪がぶり返す。「風邪神の旅立ち

もなく」の把握が客観的で面白い。いわゆる「神の旅」のいわれを巧みに扱った句だ。ユニークな一句。

豊年歌舞伎涙ながすをたのしみに 岡田 鉄

豊年歌舞伎は、豊作を祝して農村で催される素人歌舞伎のこと。収穫も終わったくつろぎとやすらぎの中で、村をあげて楽しむ芝居だ。この句の焦点は「涙ながすをたのしみに」の深い踏み込みにある。楽しみの少ない僻村の年に一度の楽しみの素人歌舞伎に年寄りたちが涙を流すのだ。人情機微を捉えることに長じたこの作者らしいやさしみが漂う。

—昭和六十年

雁わたる数にも足らぬ同期生 羽部 洞然

作者は満齢八十三歳を過ぎているが、矍鑠として壮気を内に秘めている一方、飄飄とした風格をそなえた人。クラス会か何かであろう。雁がわたってきた。四、五羽か或いは六、七羽か、一目数え得るほどの寂しい数の雁だ。その雁の数にも足りぬほど同期生も減ってしまった。静

寂な心境の奥にひとすじの澄んだ光の见えてくる句だ。そこからにじむものは、齢をうべない、今を大切に生きんとする悠久感であろう。

遊里よりつき来し猫や初薬師 岡本 庚子

作者は初薬師へ参詣すべく足を運ぶ。昔のいろざとの跡を抜けてゆくのだろう。そこから一匹の猫が作者についてくる。人なつこさ、人恋しさか、作者を離れずとうとう薬師堂までついて来た。犬が男性的とすれば猫は女性にようめのものだ。そこに微妙なあたかさと、飄逸な味わいが生まれてくる。遊里と初薬師との関係づけと、それを媒介する猫の在りように、俳諧の古趣がただよう一句だ。

雪消えて雪争ひが残りけり 竹田 恵示

「雪争ひ」は雪国の宿命を思わせることばだ。作者は真宗大谷派の本龍寺の前住職。深夜、伽藍の太い梁が雪の重さでみしみしと軋むという。雪下しのために何百万円という費用がかかるともいう。雪争いは雪下しの捨て雪の処理をめぐって起こる争いだ。大げさに言えば一家の死活にかかわる重大なことなのだ。この句に詠まれたのも、そういう争いごとで生まれた確執が、

雪が消えても消えることなく当事者の間を気まぐしくしている状態を直截に言いとどめている。表現も何の粉飾もなく、棒のようだが、雪国の悲哀を的確に打ち出している句だ。

佇ち替る人のぬくみに寒牡丹 中川 美亀

牡丹園であろう。夏の牡丹は豪華だが、寒牡丹は万物枯れつくした中のもの、それだけに孤高の気配さえ感じさせよう。寒牡丹の一つ一つに、鑑賞者はかわるがわるに立ち、流れ過ぎる牡丹に佇ち替わるひとりひとりの人のぬくみを感じとっている作者の眼はあたたかさをたたえている。沈潜した眼とこころの奥にあるぬくもりが伝わる句だ。

(下田 稔)

濱百句・第五

昭和六十年〜平成六年